

かたりべ 32

豊島区立郷土資料館だより



実習最終日に行なわれた展示シナリオ案報告のようす。各班は報告制限時間20分のなかで「二週間の苦労の成果」を精いっぱい報告した。



博物館実習メニューのひとつ「拓本とり」(高田二丁目の金乗院にて)。実習生の真剣な眼差しにご注目！

博物館実習生がやって来た！

ここ数年間中断していた博物館学芸員実務実習を、当館では今年度から再開し、去る九月二四日から一〇月七日までの二週間、都内五大学から六名の学生を受け入れました。

博物館実習は、教員免許状を取得する際に教育実習を行なうのと同様、学芸員資格取得を目指している学生にとっては、必ず通過しなければならぬ最終関門といえます。この期間中に博物館の活動に関わる様々な仕事(資料・文書の整理、写真の撮影・焼付、拓本等)を体験するのはもちろん、彼らの最終的な課題は、特別展の展示シナリオ案を作成することでした。

彼らは三班に分かれてシナリオ作成に熱心に取り組み、「帝銀事件―日本を震撼させた毒殺事件の構造―」、「栗鴨プリズン―サンシャインシティーの地下に眠る近代日本の暗部―」、「セピア色の原風景―夢を失くした子供達―」を作成するに至りました。最終日には班ごとにシナリオ案報告を行ない、館職員と実習生が各シナリオを素材に講評・討議を行ないました。

今回参加した実習生の進路は様々ですが、彼らが今回の実習を通して博物館のあり方や学芸員の仕事について何かを得、これからも博物館のよき理解者となることを我々は確信しています。

(伊藤)

特集 新館設立に向けてVII 博物館の仕事ってナニ？ (1)

今号から、「特集 新館設立に向けて」は新シリーズに突入します。その名も「博物館の仕事ってナニ？」です。これは、日頃郷土資料館の職員がどのような仕事をし、それが結果的にどのような事業に展開していくのか、読者の皆さまに知っていただこうと企画したものです。

「博物館に勤めている人って展示室の見張りをしているのかしら?」、「学芸員というのは学会の進行をする人?」など、とかくわかりにくい(馴染みのう

すい)郷土資料館の仕事内容ですが、具体的事例に基づいて紹介していくつもりです。この特集記事を通して、目に見えない博物館のウラの部分にも興味をもっていただければ幸いです。



展示室正面に据えられたタイトル壁体

記念すべき第一回目は、博物館の教育普及活動のひとつにあたる特別展を取り上げました。一年間に二回開催される郷土資料館の特別展がどのような過程を経て開催日を迎えるのか、今回は去る八月六日から一〇月三日までの会期で開催した特別展「植木屋のある風景」を事例にみていくことにしましょう。

I 特別展企画案の作成

特別展の担当学芸員は、当館の特別展にふさわしいテーマがあ

る程度固まると、

- ①開催の趣旨・目的
- ②会期
- ③展示構成案
- ④特別展開連事業などを盛り込んだ企画案をまとめていきます。第一弾の企画案は、特別展開催日の四〜五ヶ月くらい前に作成するように



学芸会議のようす

しています。この企画案は、二週間に一回の割合で開催される学芸会議(中段写真)、数度(一か月に一度のペースで開催)の職員全体会議、および郷土資料館運営委員会(二か月に一度のペースで開催)での議論を経て、次第に具体化していきます。ちなみに「植木屋のある風景」の場合は、全部で四回にわたり企画案を修正した後、実施するにいたりました。

II 現場への取材と資料所在確認

第一弾の企画案作成と同時に、展示したい資料がどこにあるのか、あるいはそれが来館者にインパクトを与えられる資料かどうか、さらに借用の可否を確認するために、取材に出掛けます。取材先は、公的機関の場合、個人宅の場合などさまざまです。取材先では、その資料にまつわるお話を中心に情報収集を行いますが、新たな資料をご教示いただいたり、別の資料所蔵者を紹介してもらったりする場合も多く、特別展を行なうたびに新たなネットワークが広がっていきます。

また、今回の特別展のように、現況写真を写

真資料として撮影する場合も多く、四月初旬の桜が満開の時期には、午後半日で上野公園・隈田川堤・飛鳥山と東京の花見名所のハシゴを試みた日もありました（あくまでも写真撮影が目的）。



花見客で賑わう上野公園

III 展示室動線のイメージづくり

展示可能な資料がある程度集まってきた段階で、それらの資料を具体的にどのような順序で展示すればもっとも効果的か（来館者にとってわかりやすいか）考えていきます。ただし、展示室内における展示ケースの種類や位置はほぼ決まっているため、当初の



展示室内に再現した「植木屋の庭」

構成を止むなく変更しなければならぬ場合も生じます。また、展示資料の大きさにより、展示ケースに納まらなかったり、逆に空白ができてしまうこともしばしばあります。その時は、展示資料点数の増減や展示ケースの大きさを変更することにより調整をしていきます。こうした試行錯誤を繰り返しながら、動線をイメージしていきます。

IV 特別展図録の作成

当館では、特別展開催時には展示内容に沿った特別展図録を作成し、有償頒布しています。しかし、単なる記念品、あるいはカタログとしての図録ではなく、あとあとまで資料集としての役割を果たすものを目指して執筆・編集しています。そのため他の博物館で発刊される特別展図録よりも、文章や図版の占める割合がやや多めになっており、そこが当館で編集する図録の特徴にもなっています。もちろん、本文中で表現される文章は、各分野ごとの先行研究を踏まえたものであり、いわゆる「郷土パンザイ主義」に陥らないよう、客観的な視点で執筆するように心がけています。

印刷業者へ入稿してから納品されるまでに約ひと月を要するため、「植木屋のある風景」の際には、五月下旬から執筆を始め、六月下旬からは割付作業、六月末に入稿という段取りにな

りました。

V 展示委託の実施と現場工事

当館には特別展専用の展示スペースがないため、常設展示室および収蔵展示室内に壁体を設置して、来館者が展示資料を見学する順路（動線）を作っていきます。こうした壁体設置、図版パネル、造作物、および切り文字などの作製は、展示業者による業務委託で行なっています。もちろん、壁体配置・造作物のラフスケッチや図版パネルの原稿は資料館側で作成し、展示業者との打合せを進めながら設計図を作成してもらいま



「植木屋の庭」再現工事



経師職人による作業風景

す。その設計図に沿って現場工事が行なわれるわけです。

特別展開催初日の一週間前から、郷土資料館は展示準備のために展示室が閉鎖されます。この残された期間内に会場の現場工事と資料列品を終

わらせ、開催初日に間に合わせなければならぬわけです。今回の場合は、七月三〇日の展示室閉鎖初日に常設展示資料の撤収を学芸員で行ない、翌三一日に造作物の設営を、八月一日に壁体の設営を展示業者によって実施し、その後四日間かけて、外部機関・個人宅からの資料借用、および写真パネル・展示資料の列品を学芸員が行ないました。そして、照明などの調整を経て八月六日の開催に至りました。

■特別展の目指すもの

以上、特別展開催に伴う主要な作業内容を紹介してきました。もちろん、限られた時間のなかで多くの作業量をこなしていくためには、事務職の迅速な事務判断や事務処理、他の学芸員



資料列品作業

による図版作成、資料の写真撮影など職員全体の協力が前提となつてくることはいまでもありません。

特別展は、単に「珍品陳列の場」ではありません。展示資料や特別展記念行事（講演会やシンポジウムな



8月7日に行われた展示説明会

ど）から、さまざまな問題点を引き出し、それらをさらに深めていく場になればと、私たちは考えています。特別展をどう捉え、どう観るかは、もちろん来館者個人個人の自由です。しかし、館側（主催者側）の展示意図を読み取り、自分の考え方とよかにズレるのか、あるいは一致しているのか比較していくことも、博物館での特別展見学のひとつの有効な方法だと思えますが、いかがでしょうか。

特別展開催までの一連の準備過程について、理解していただけたでしょうか。次号はまた別の郷土資料館事業について紹介していきたいと思えます。

（秋山）

郷土資料館 なんてもQ&A

Q 先頃池袋演芸場が新装再開され、落語ファンの私は大変喜んでます。かつて区内には池袋演芸場の他にも寄席があったと聞きましたが、本当でしょうか。

A 本当です。戦前の区内には多くの寄席がありました。大正一五年（一九二六）の東京の寄席を網羅したものに、「東京演芸場組合員名簿」（二遊亭円生「寄席切絵図」所収）がありますが、そこから区内の寄席を抜きだしてみると、庚申演芸場（巣鴨町・武蔵野倶楽部（巣鴨四丁目）・豊島亭（西巣鴨宮仲）・金松亭（西巣鴨宮仲）・中央亭（西巣鴨向原）・新末広（池袋）・生晃館（雑司ヶ谷水原）・栄久亭（雑司ヶ谷水久保）・高田亭（高田町）の九軒の席があったことが知られます。また大塚駅前に大塚鈴本亭という寄席がありました。また戦災で焼失し、昭和三〇年六月に再開されました。この席も今ではもう残っていませんが、以前の池袋演芸場と同じく豊敷で、筆者も聞きにいった記憶があります。

これらの寄席は、落語以外の音曲や講談・浪曲が中心の席であったと思われれます。家から浴衣がけで歩いて行くことができる横丁の寄席が、テレビがない時代の庶民の娯楽だったのでしょう。

（小林）

収蔵展示室の衣替えをしました

来年二月の冬期特別展オープンまで、郷土資料館収蔵展示室では収蔵資料を中心としたミニ展をおこなっています。展示内容は以下のとおりです。この機会をお見逃しなく、ぜひご来館ください。

★植木屋のある風景（抄）

去る一〇月三日まで開催していた特別展「植木屋のある風景」で展示していた資料のうち、いくつかの原資料、および地図パネルなどをピックアップして展示してあります。

「駒込・巣鴨の植木屋たち」の部分では、染井通り沿いにあった植木屋丹羽家の蘭鉢や、田中三郎氏から寄贈された各種植木鉢などを、また「染井の野夫 伊藤伊兵衛」では、元禄・享保期（一六八八〜一七三五）を中心に活躍した染井の植木屋伊藤伊兵衛三之丞・政武父子の著した『錦繡枕』や『地錦抄』ものなどを展示しています。

★豊島の空襲

一九四五（昭和二〇）年四月二三日の空襲は豊島区内の約七割を焼き、多くの死傷者を出しました。資料館では戦争の悲惨さと恐ろしさを伝え、平和について考えていただくため、戦争関

係資料の展示をおこなっています。今回は空襲関係資料として、焼夷弾の筒、空襲による火災で焼けて溶けた薬瓶と小銭、炭化した米とおひつ、B29の排気筒などのほか、防災頭巾、救急袋、啓蒙普及のための『防空絵とき』（財団法人大日本防空協会編 一九四二年）などを展示しています。

★学童疎開がじまった

一九四四年から始まった集団学童疎開は、子どもたちを巻き込んだ戦争の一側面として忘れてはならない出来事です。ここでは、当時高田第五国民学校（現目白小学校）五年生だった佐藤静子さんと家族の往復書簡を中心に展示しています。高田第五国民学校は長野県平穏村（現長野県山ノ内町）の渋・上林温泉に疎開しました。疎開先での写真などもあわせて展示しています。

★新収蔵資料「雑穀商・ともゑや商店」の巻

一九四七年のヤミ市時代から今年七月までの約四六年間、西池袋で雑穀・豆類を商ってきたともゑや商店（店主新井孝三さん 西池袋三一―二二―四）。この名物豆屋さんが閉店する際、当館に寄贈された商売道具約二〇〇点のうちの

一部を紹介しています。

ヤミ市時代からの年季の入った一斗だるや一升ます、洪紙や紐で補強されたかごやふるい、五つ玉そろばんなど、どれも使いこまれて汗と雑穀の油がしみこんだ貴重な資料ばかりです。ともゑや商店の場合、地元の方からの情報と店主のご協力によって資料を一括寄贈していただける幸運に恵まれましたが、都市化の波にもまれ街角の古くからある商店は次々と姿を消しています。皆さんのまわりの気になる情報をぜひ資料館までお寄せください。お待ちしております。

（横山）



緑・地域・人を考えるきっかけに

特別展「植木屋のある風景」を終えて

【世田谷区在住 21才女性】

★江戸の園芸について興味がありましたので、たいへん参考になりました。さらに一歩進んで当時どのような植物が人々の間で愛好、栽培されていたかなど知ることができればと思います。

【西多摩郡瑞穂町在住 28才女性】
このように、展示テーマのユニークさを評価していただいたものから、展示内容に対するご批判までさまざまなご意見をいただきました。

さて、来館者アンケートをバラバラと繰っていくと、ある特徴が浮かびあがってきます。それは、今までに当館で開催した特別展に関する感想の主流であった「懐かしい」といったものがごく少数しかみられなかったということです。

これは駒込・巣鴨地域の園芸の隆盛を知っている人が、殆どいなくなってしまったことを示していると考えられます。つまり、駒込・巣鴨の園芸は、過去の歴史的対象の一つとなり、もはや聞き取り調査などでは正確に復元できないほどの「昔ばなし」になりつつあるわけです。

「植木屋のある風景」を「昔ばなし」にしないためにも、郷土資料館では、今後も引き続き情報・資料収集に努めていきたいと思っております。

なお、この特別展の成果と今後の課題についての詳細は、『年報』第9号（一九九四年秋頃発行予定）をご参照願います。

（秋山）

郷土資料館では、去る八月六日から一〇月三日までの会期中、特別展「植木屋のある風景―園芸都市―」の地域像をさぐる―を開催いたしました。

「寒い夏」あるいは「毎週やって来る台風」の影響が、八月中の来館者数は伸び悩みましたが、九月以降は多くの方々にご来館いただき、最終的には二二九七名の来館者を数えました。また、会期中三回にわたって実施した記念講演会も、「講師の先生のお話がわかりやすかった」と好評を博しました。

ここで、特別展会期中に資料館へ寄せられた来館者からの声（アンケートに記された感想から）の一部を紹介したいと思います。

★豊島区にふさわしくユニークな展示だ。半胴襦はもともと何に使ったものだろうかと興味があった。

【千葉市在住 59才男性】
★良く資料を集められております。菊は具体的にどのような形状の品種が栽培されていたのかわかりたくて来館しましたが、わからず残念でした。現在の豊島区との関わり合いの説明が欲しかった。

【区内南長崎在住 59才男性】
★大変いいタイムリーな試みだと思います。しかしよほど興味のある人でないと、まず足を運

ばないのではないか。それと若い人は関心をもたないのではないかとすればどういふ点を突いていけばいいのか考えたいです。絵・写真・地図パネル・現物の鉢だけではちょっと淋しいです。

【区内西池袋在住 51才男性】
★資料を集める苦心は大変なものと感じますがテーマが判然とせず、失礼ですが残念でした。

【相模原市在住 64才男性】
★小規模ながら、いやそれ故に密度の濃い内容だと思えます。植木屋や大工など、日本の伝統を守りつつ、常に新しい状況に適応していかなければいけない職業のあり方をもっと知らなければいけないのですが、緑と人、都市のあり方を考えるきっかけになりました。

【柏市在住 22才男性】
★私共が住んでいる染井にこのような歴史があったことを知り、感激しました。

【区内駒込在住 41才女性】
★江戸時代の人々の生活と園芸との係わりの深さ、またその園芸が豊島区にも深い関係があったことを知りました。今回の展示から、昔より

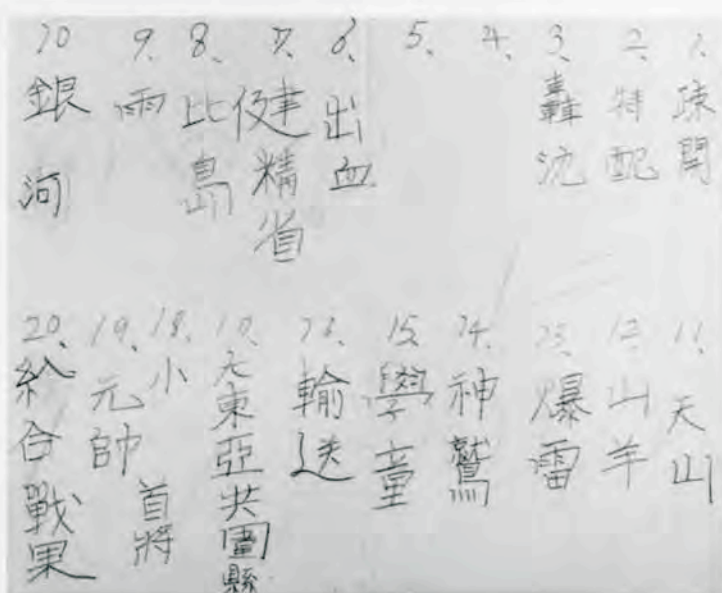
緑が減少していることに気づき、もっと緑を大切にしていこうと考えさせられました。

連載 一点の資料から 《その7》

「かみわし」つて漢字で書けますか？

今回は、「一点の資料」ならぬ「十二点の資料」のお話です。

次に掲げる書き取りの答えは、長野県上山田温泉に集団学童疎開をしていた池袋第二国民学校の五年男子のものです。集団学童疎開については詳しくは当館発行の特別展図録『さやうな



ら帝都 勝つ日まで——豊島の学童疎開——

・「子どもたちの出征——豊島の学童疎開・2

——」を参照していただきたいと思いますが、

簡単にいうと次のようなことです。第二次大戦

(アジア太平洋戦争)末期、アメリカによる本

土空襲から逃れるため、大都市から地方へ移る

政策がとられました。これが疎開(人員疎

開)です。このうち国民学校(一九四一年

四月、小学校を組織変え)学童で、地方に

適当な身寄りのない子どもたちを学校単位

で疎開させたのが集団学童疎開です。彼ら

は一年余の間、慣れない土地で親たちと離

れて暮らさねばなりませんでした。

池袋第二国民学校の当初の疎開先は長野

県の上山田村(現・町)と屋代町(現・更埴市)

で、この答案を書いた子は上山田温泉の上

山田ホテルを宿舎(学寮)にしていました。

疎開学童は上山田の学校に通うことになり

ましたが、とても教室は足らず、学寮でも

授業をしていました。このテストはそのよ

うななかでのものです。

まず、下にある裏面(本当はこちらが表)

を見て下さい。同じく疎開学寮となってい

た旅館・円山荘の案内チラシが使われています。

テスト用紙にもこと欠く、物資不足を物語って

います。戦争のさなかで観光旅行もほとんどな

く、通常の旅館営業は不可能だったのでしょう。

その意味ではこのチラシは用なしだったのかも

しれません。

さて、書取の出題を見てみましょう。まず目

につくのは「轟沈」「爆雷」「元帥」「総合(?)

戦果」という軍事・戦争用語です。「疎開」「特

配」(特別配給、当時ほとんどの物資は配給制

でした)「出血」「神鷲」(特攻隊機をしばしば、

こう呼んでいました)「輸送」「大東亜共圏縣」

(大東亜共圏)なども戦争関連あるいは戦時

下の言葉といえるでしょう。それに「比島」「天

山」のアジアの地名も

戦争関連に入れてもよ

いかもしれません。18

の正解は「少将」でし

ょうか、「首相」でしょ

うか? 「決戦教育」と

呼ばれた戦争末期の教

育の一つの例です。

(青木)

豊島区立郷土資料館からのお知らせ

★刊行物発刊のお知らせ

◎郷土資料館調査報告書第十集

『豊島の集団学童疎開資料集(5)日記・書簡編V』

―高田第五国民学校(統)―

第二次大戦末期の集団学童疎開の記録、第五

弾。今回は志賀高原のふもと、長野県平穂村

(現・山ノ内町)上林温泉で一年余りを家族と別

かれて過ごした高田第五校(現・目白小学校)

女子学童の家族との往復書簡全二四一通の後半

を収録しました(前半は既刊第四集に掲載)。

敗戦間近かの豊島と長野の生活と親子の交流が

つづられています。

なぜ母親は一〇〇余通もの手紙を書いたのか。

送ったはずのミカンはずなせ届かないのか。四

月一三日・五月二五日の空襲の中、母と祖母は

どう逃げたか。そして出撃まぎわに最後の手紙

を疎開先の少女に送る特攻隊員。一見、明るく

けなげな文章の中からたくさんのことが読み取

れるでしょう。手紙に描かれたさし絵や同封さ

れた習字、関連写真など多数掲載。(一〇〇〇

円)

なお、既刊の資料集(1)~(4)(日記・書簡編I

~IV)の内容は次の通りです。

(1)時習国民学校(長野県戸倉温泉での生活記録

だんだん増える「おやつなし」の記事、親しん

だ寮母さんとの別れ)……一三〇〇円

(2)長崎第五国民学校(その一)(福島県鹿島町・

山都町に疎開した姉弟への母やおばたちから

の手紙の数々。体験記「十人の世界」を付す)

……一五〇〇円

(3)長崎第二国民学校(その一)(山形市での疎

開生活を中心に詩人吉原幸子さんの日記を収録

「兵隊さんになったつもり」で過ごす戦時下の少

女の意識と生活)……一七〇〇円

(4)高田第三国民学校・高田第五国民学校(平穂

村・上林温泉で。志賀高原への行軍も大事な

訓練)……九〇〇円

◎『豊島区立郷土資料館年報』第八号

一九九二年度における郷土資料館事業の詳細

をまとめたものです。内容は、I 設立の経緯、

II 沿革、III 管理・運営概要、IV 事業概要、V 利

用状況、VI 資料館日誌抄、VII 条例・規則、から

構成されています。無償で頒布しておりますの

で、入手希望の方は資料館受付までお申し出願

います(なお、入手希望理由を受付にて所定の

用紙に記入していただきます)。

編集後記

しばらくの御無沙汰でした。「かたりべ
32号」をお届けします。

今号からはじまった「特集」記事はいか
がでしたでしょうか? 郷土資料館では、
今回取り上げた特別展以外にも多くの仕事
を担当しています。次号以降、それらを順
次わかりやすく紹介していくつもりです。

* * *

ついこの前、夏の特別展が終了したと思
ったら、冬の特別展の時期(来年二月中旬
より)がヒタヒタと近づいてきました。巷
ではそろそろ忘年会・クリスマスと、年末
お決まりの「大イベント」に向けて盛り上
がっていきませんが、我々資料館職員には特
別準備という「大イベント」が待ってい
ます。エッ?どちらかを選べって? もち
ろん私、編集子は、何の迷いもなく前者の
「大イベント」を選びます。

かたりべ

・
No.32

・
1993年11月30日
発行

・
豊島区立郷土資料館

・
豊島区西池袋2-37-4

・
電話03-3980-2351